



餓鬼随想録 I



おもしろい象形文字

福瀬餓鬼



※写真は籍甚無竟（千字文より）

硯と長寿を競っても勝てる訳がない。今思う事は、生きている間に印材を全部刻ってしまおう、古墨も全て使い果そう、そう決心して先ず長恨歌（白楽天作）全文を刻した。蘭亭集序（王羲之作）も、般若心経（分刻六十二顆、一字一字二百七十二顆）も仕上げた。そして今、千字文に取り組んでいる。残すところ二百字である。印材はまだまだ残っている。眼の見える限り頑張るしかない。

古墨は試墨の段階だが、小品画を百点程画いた。墨色が気持ちいい。良質なものはいいに決っているが、悪質なものも馬鹿にならない。使い様に依っては特徴が出て面白い。死ぬまでに使いきれようだろうか。こんな気持ちになったのも、無駄遣いをしていたからだと思えてならない。

私達は、日常生活の中で失敗や間違いを繰り返す。そんな事のないように親や先生、先輩に教えられて来た。私は凡そ七十年生きて来て、どれだけいやな思いをしたか知れない。自業自得である。仮に順調に進めば、もっと偉い人になっていたかもしれない。つい最近まで人生随分損をってしまったと思っていた。しかし、七十歳を目の前にして良い事が次々に起る様になって来た。どうも失敗の数、いやな思いをした分だけうれしい事が起る様に思える。私の場合、人生ちゃんと辻褄が合う様である。



ものの真中を突き通しているこの形が正しい象形である。少し思いを脹らませ作ってみた。

スーパーへ買い物に出かけるのに、重い石の銭を担いで出かける。古代の買い物も大変であったろう。しかし、今はどうだ。カード一枚で何でも出来てしまう。真夜中であろうが何の心配もいらぬ。都合が良くなつたと喜んでいと不都合がちゃんと生まれている。車にばかり頼っていると足腰が弱る。美味しいものばかり食っていると病気になる。いやな思いをしなければ他人の痛みもわからない。そろそろ昔の自給自足の生活に戻らなければならない。

私は職業柄長生きをしなければならないと思っている。芸術家には二通りある。天才型と不器用型である。花火に例えれば夜空を飾る一発屋とプチプチプチの線香花火型である。誰でもが天才にはなれない。持って生まれた才能である。天才型には長寿は稀である。普通は皆ゆっくり型である。九十、百を生きた人達の作品はエキスだけである。余分なものは何もない。味わい深く人間味が溢れている。六十、七十で死んでしまつては中途半端だ。こうなれば長命である事も能力と努力が必要ではなかろうか。私は昭和十年生まれである。幸いまだ元気である。少なくとも生まれた時の生活に戻り、徐々に古代の生活に戻ろうと決心した。

北海道空知郡南富良野町落合、十勝岳連峰の麓、空知川源流の谿川の淵である。掘立小屋ならぬ床高小屋である。罨もいる、蝦夷鹿も走る、イワナも窓から竿を出せば釣れる、六月にはイトオも産卵に上る。春は山菜、秋には茸、飲み水は山から吹き出している、洗い物は清流で事足りる。電気もなし。正に周囲は縄文時代そのものである。この生活に入れば長生き出来そうに思う。

以前九十過ぎた中川一政先生に

「先生、長生きの秘訣は何ですか？」と尋ねた事がある。

「それはね、そんな事聞かない事だよ。」の返事。ふと思い出して僕のこの生活もこだわりがあり無駄かなとも思う。



※写真の文字は飲酒。

甕の中の水、即ち酒が熟している様子を表した文字である。

酒といえば私も晩酌程度嗜む。親父も呑んだ。お袋にこんな話を聞いた。仲人が「お酒は呑まれますか?」。親父の母親に「はい、何かあれば一本位です。お祭りとかおめでたい時は二本ぐらい呑む事があります」と聞いて安心した。結婚後、銚子一本と一升瓶との違いに気付き驚いたと言う。

中国の詩人、杜甫「飲中八仙歌」とか、李白や白楽天らの詩を読むと皆、呑兵衛であった様に思われる。しかし、酒は好んだであろうが、酔ってこの様な名詩が作れるだろうかといつも疑ってきた。陶淵明「飲酒」の中に「此の中に真意有り、弁せんと欲して己に言を忘る」どの様に表現していいかその言葉もみつからない。と言いながらちゃんと言い尽くしている。

私が酔っていい気分になって書いた物を翌朝見ると、とても見られたものではない。まるめて捨ててしまう。やはり書くときは精神を集中し、気力充実していなければ駄目であると思っていた。

六十も半ばを過ぎた今、必ずしもそうでない事に出くわした。

昨夜書いた色紙に押印せよと言う。そんなもの書いた覚えがないと言い張った。目の前に二十枚程出されてびっくりした。今までに書いた事のない作品である。自分が書いたものかと疑った。泥酔状態で書いたらしい。無意識に筆が動いている。邪心が無い。良い出来とは思えないが普通では出来ない作品である。私程度の修練ではそうは行かないが、李白や陶淵明であれば酔っていても出来たのではなかろうか。酔っていてもいなくても、そんなことは問題ではないのであろう。

いずれ私も九十、百歳まで生きられればその様な心境になるかもしれない。



うたげと言えば現在は祝宴、宴会の意である。しかし、文字の出来た大昔の「宴」は、どんちゃん騒ぎの宴会ではない。時の流れとはいえ、これを機会に祝宴のあり方を考えてみてはいかがなものか。話は全く違うがちょっと思い出した事がある。

「一皮むけた」

「先生、元気になられて良かったです」

「うん、でももう死ぬのがこわくなくなったね」

「ええ？先生死ぬのがこわかったんですか」

「そうは思わなかったけれども、一度経験してとても気持ちが良かったもの・・・安心したよ」

「へえー、そんなに気持ちのいいものですか」

「うん、洗面所でドッと血を吐いてそれを見てもう死ぬな、と一瞬思った。ところがふわっとしてとても気持ちが良かった。気が付くと皆んな周りにいるだろ。びっくりしてどうしたの？」

「先生、大丈夫ですか・・・。四日間意識がありませんでした」

「あ、そう。死んでたわけだ・・・」

「先生、生き返ったわけですからこれから長生きできますね」

中川一政九十二歳の出来事である。

その後回復してからご機嫌伺いもあったが、実は仲間達の間で中川先生サムホールの小さいものだが良い絵が出来た、是非見たらいいと薦められた事もあった。今まで掛かっていた大きなバラの絵をはずして



物凄いスピードで、火の玉が火を噴いて走っているように見える。衝突すれば爆発する。正に岡本太郎の世界である。もともと「気」というのは目には見えない。それを形で表すとなると至難の業である。自然現象の「気」は、晴れ曇り雨、と凡そ察しがつくが、人間の「気」といえばどうであろう。

「心焉こころに在らざれば見れども視えず聞けども聴こえず食えどもその味わいを知らず」(『大学』) その気が無ければ何をしても駄目という事であろう。

人間の基本は「気」と言っても過言ではない。「気」が弱まると病原体が隙をみて入り込み病気になるってしまう。常に気力が充実していれば、ガンも恐れる事はあるまい。

「先生、先生はあまり喋られませんね」

「何も聞かれないのに何を言ったらいい？」

「聞かなくても『元気かね』とか、『景気はどう？』とか何かあるでしょう」

「そんなこと言えばいいの、僕はね電気の出てない人とは話をしない事にしてるの」

「電気ってなんですか？」

「誰でも持ってるだろ」

「へえー、僕はどうですか？」

「うん、出てるよ」

「あ、そうですか、よかった」

「僕はね一等頭のいい時は絵を画くの、今日は少し駄目だなと思うと書を書くの、全く悪い時は人と話をするの」

「へえー、それじゃ先生今日は駄目な日ですか」

「そう」

「じゃ駄目な先生ばかり僕は見てる事になりますね」

「そう。本当はもっといいんだから、ウフフフ…」

中川一政先生との会話である。



大地に一步一步足を踏み締めて歩く。足跡の象形である。

北海道の溪谷にイワナ、オショロコマを釣りに入ると、必ず熊の足跡や糞に出くわす。林道のど真中に山盛りどかっと積んである。「ここは俺の縄張りだ。入るなら覚悟して入れ」との警告である。やや柔らかかな土の処に大きな足跡がある。爪の跡もくっきりとついている。思わずゾッとするのだが、谿川へ竿を振った途端すべて忘れてしまう。豊漁は言う迄もない。

山奥で熊の足跡を見てヒヤヒヤするのは、またスリルがあってよろしい。十年この方、まだ一度も出くわした事は無い。出会ったらその時だといつも思っている。

ところで、私達人間の先祖は猿であったかどうかは知らないが、二本足で立ってからは、一步一步歩く事から始まっている。必要に応じて走るくらいが速度であった。草鞋履き、三度笠、一本刀で股旅姿のやくざ映画は爽やかで気持よく面白かった。より早く便利にと考え出され、自転車が登場して来た。更にオートバイ、自動車へと進んだ。文明は留まる処を知らない。最近プロペラ飛行機、ジェット機、ロケットと、もう人間の速度ではない。鉄砲の弾である。

私の友人でしょっちゅう海外へ出かけるのがいる。何十時間も飛行機の中で疲れるだろうと言えば、初めのうちは疲れたが今は慣れて寝ているから疲れなくなったと言う。自分は寝ていても寝たまま飛んでいるのである。疲れな訳がない。私はそう考える。若い時は働かねばならぬ。自分だけゆっくりという訳にはゆかぬ。駅のエスカレーターを走って登る人も多い。

「そんなに急いでなんとする。先に待つのは棺桶ばかり」

しかし、そろそろ私達は歩く速度を取り戻さねばならない。そして、自然破壊をやめ、自然に従って生きる事を考え努力しなければならない。

